

総合的な学習の時間の活用による ESD の実践

北海道教育大学附属札幌中学校

校長 萬谷 隆一

生徒会係 山下 彩

1. 本校の ESD の特徴

本校では総合的な学習の時間の学習活動が「学び合い」を支える大切な基盤になっている。コロナ禍で諸活動に制限が多く、学校行事や特別な取組がしにくい最中、総合的な学習の時間が ESD を支える主軸にもなっている。第 1 学年から段階的に、課題を設定し探究する学習活動を積み重ね、『人格の発達や、自律心、判断力、責任感などの人間性を育むこと』『他人との関係性、社会との関係性、自然環境との関係性を認識し、「関わり」「つながり」を尊重できる個人を育むこと』を目指している。

2. 活動・全体計画

* 第 1 学年

「リアライズ」

探究課題：地域と関わるための実践と考察

コロナ以降：地域に関わることを「理解し、実行し、実現する」

* 第 2 学年

「リフト」

探究課題：社会貢献と働くことの意義

コロナ以降：自己の理想の生き方の追求

* 第 3 学年

「リレイト」

探究課題：現代の社会の問題と、主体的・協働的な解決のあり方

コロナ以降：自己の理想の社会の実現を目指した問題と、その解決に向けた実践

1 年生ではグループで、2 年生以降は個人で探究課題を設定し、課題解決に向けた取組を行った。1 年生の地域の社会問題を探し、給食の食べ残しやゴミのポイ捨て、カラスの被害、防災や地域のよさを見出す食べることや暮らすことを考える探究、2 年生のキャリア教育に関わる生きることを考える探究、3 年生では SDGs の目標から探究課題を設定し考える探究を通して、ユネスコスクールが考える ESD に関する活動にリンクするようにした。

3. 活動事例

総合的な学習の時間「リレート」

課題 カカオ生産の課題を解決するために私たちはどのように関わっていくことができるだろうか

3年 森永製菓のチョコレート工場見学

1 はじめに
「チョコレートが大好きだから」それだけの理由でカカオ生産の問題について取り組みました。チョコレートは甘くて美味しく食べているだけで幸せな気分になります。しかし、その原料を作っている人たちはどうでしょうか。私達が安く美味しいチョコレートを食べられているということは低賃金の労働や児童労働などの生産過程において安くできる要因があるということだと思います。SDGsの考えにもあるようにすべての人が平等である権利を守りたいです。そのためには私のような働いていない人や影響力が小さい人に何ができるかを明確にすることが必要だと思ったので、この課題に取り組みました。この課題を解決することですべての人にとってチョコレートが美味しい存在、幸せになる存在にしたいです。私も罪悪感なく食べられるようにしたいです。

2 カカオ/チョコレート生産の実態について
この課題の解決について取り組むにあたって、問題について知っておくことが大切だと思ったのでインターネットで調査をしました。その結果、カカオ生産の問題を知ることができました。
まず、カカオ生産には児童労働とカカオ農家の貧困という2つの問題があることがわかりました。
・児童労働：カカオ農家は小規模な農家がほとんどだが、カカオの生産には多くの労働力が必要になる。児童は低い賃金で雇うことができるため、この問題が起きている。
・カカオ農家の貧困：カカオ農家はもとも貧しい人が多く、教育をほとんど受けたことがない。カカオ生産の知識や技術が足りないために、カカオの収穫量が十分に得られず、生活を支えられる収入がないことがこの問題を引き起こしている。

3 課題の解決「サステナブルチョコレート」について
課題を解決するためには企業と消費者の協力が必須なため、企業への影響と消費者への影響という二つの視点から考えました。
まず企業の取り組みについて調べたところ、サステナブルチョコレートというものを見つけました。サステナブルチョコレートはカカオ生産の課題を解決するために作られたチョコレートです。カカオ農家の生活向上が考慮され地球環境にも配慮されていることが特徴として挙げられます。
森永製菓さんが行っている、このようなチョコレートのうちフェアトレードチョコレート販売するキャンペーンについてインタビュー調査を通して調べました。
【フェアトレードチョコレートの仕組み】

カカオの国の寄付になる → 農業改善のお手伝い → 学校に行ける子供も増える → カカオが売る

↑ あなたがチョコレートを食べる ← チョコレートになってあなたの元へ ←

この商品にはフェアトレードの認証を受けた原料を使用します。しかし、フェアトレード認証原料の価格は生産コストをまかない、経済的、社会的、環境的に持続可能な生産と生活を支える奨励金を支払うことが必須です。そのため、原料調達コストが高くなり、企業は利益を出すことも重要なのでその分商品価格も上がります。このようにコストの面から見ると消費者に負担がかかるため消費者の理解が大切であると考えました。
その他3つの企業にサステナブルチョコレートの取り扱いについてインタビューをしたところ、どの企業もサステナブルチョコレートを使用した商品をいくつか取っており、なかには目標を掲げている企業もあることがわかりました。このことから問題解決の方法に消費者が関わる機会があると考えられ、ただ全ての商品が解決に貢献しているわけではなく、認知されていないと解決できないと感じました。
次に実際にコンビニエンスストアやスーパーでサステナブルチョコレートを使用したチョコレート商品を探しに行きました。事前にそのような商品を探してから行きましたが、とても見つけにくいのが現状でした。他の商品との差別化が薄く、マークがついていなかったり、ついていたとしても小さく見て

つけられなかったりして、カカオ生産に関する問題を知らない人が意識的に購入するのは難しいと思いました。

4 持続可能な消費生活
解決方法の調査から「エシカル消費」というものを見つけました。エシカル消費とは消費者それぞれが飢餓などの社会的課題の解決を考慮したり、そうした課題に取り組む実業家を応援しながら消費活動を行うこと(例えば、サステナブルチョコレートを使用した商品を購入すること)を指します。
このような持続可能な消費生活を推奨していく上で好きなものを買う権利との衝突が起こること考えました。

5 交流会
交流会では上記の持続可能な消費生活と好きなものを買う権利の衝突が起こる中でどのように消費生活を行って行くべきかをテーマとし意見をいただきました。
【交流で出た意見】
・2つを両立する。
→ 極端はよくないが、どちらも大切にすべきだと思う。
・持続可能な商品が売れることも大事だと思う。
→ よいところの発信、マークをわかりやすく。
交流の結果、2つを両立していくべきだという結論に至りました。他の意見もありましたが自分が日常生活で聞かれるのは消費なので企業や団体の活動の効果が最大限に出るような消費をするべきだと思いました。

6 おわりに
カカオ生産の課題を解決するために私たちは消費生活の中で関わるすることができます。エシカル消費のように課題解決が考慮された商品の購入やキャンペーンの参加など持続可能な消費生活を行うことが最も身近で簡単だと思います。しかし、課題や商品を知らないとそのような消費ができず、さらに値段が高くなることへの理解が必要なので消費者の問題意識を高めていくことがまず必須だと思います。また、持続可能な消費生活と好きなものを買うことをバランスよく両立すべきだと思います。そのためにエシカル消費の問題を知ってもらうこと、可能な限りエシカル消費をしてもらうことで、両立していくべきだと思います。現段階でより多くの人に問題意識をもってもらう方法がわかっていません。この問題は大きな規模なので働くようになって影響力が今よりも大きくなったら、例えば企業などの大きな団体としてSNS(利用者が多く、世界中で普及してきているから)での情報発信など、できることに目を向けてこれからも考えていくべきだと思います。
私がこの問題を知り、解決しようと思った要因はただチョコレートが好きだということです。本当に小さなことでも行動を起こせば世界の誰かを救うことにつながるかもしれません。これからこの問題が解決に向かうよう、多くの人の小さな行動が大きな支援につながるようにしたいです。

【引用文献・参考文献】
・特定NPO法人ACE「ガーナ・カカオ生産地の児童労働」より
・株式会社ファミリーマートホームページより
・株式会社明治ホームページより
・生活協同組合コープさっぽろホームページより
・イオントップパリュ株式会社ホームページより
・消費者庁「エシカル消費とは」より

上記は3年生が実際にまとめたレポートである。SDGsの目標「10. 人や国の不平等をなくそう」から、カカオ生産における不平等に着目し、「サステナブルチョコレート」について探究を深めた。探究を行う上では学校での調査活動はもちろん、実際に森永製菓に電話でインタビューを行ったり(コロナ禍以前は直接訪問も行って)、他の企業にメールで質問をしたりもして、より根拠をもって課題解決に向かえるよう調査方法も工夫した。

調査結果はそれぞれこのようなレポートにまとめ、冊子に残している。

4. 成果と課題

総合的な学習の時間以外にも、身近な社会問題や身近な大人がどのように職業を選択し働いているのか、またSDGsの目標について考える生徒が増え、社会参画への意識、持続可能な開発についての意識が高まったと捉えられる。

やはり従前のようなフィールドワークができていないことで活動の幅が狭まっているように感じている。学校としても今まで通りではなくても、生徒が生き生きと縦横無尽に探究活動できる方法を模索していかなければならない。